3・11能と文楽、鎮魂の競演

東京でともにキリスト教劇

東日本大震災から3年の来年3月11日、ともにキリスト教を題材にした能と人形浄瑠璃文楽のコラボレーション公演が、東京・渋谷の観世能楽堂で開かれる。能舞台での文楽上演は異例。日本を代表する二つの古典芸能が、ひのき舞台で被災者への祈りを捧げる。

能「聖パウロの回心」（林望台本）は、観世流宗家の観世清和さん(54)が吉利支丹（キリシタン）能を復活させ、昨年3月に都内のホールで初演。「能は鎮魂の芸能。次は3・11に能舞台で」と決意した。

清和さんは構想中、文楽大夫の豊竹英大夫さん(66)が語る「ゴスペル・イン・文楽」を知った。幼い娘を病で失った悲しみを背景に1991年から上演を重ね、復活するイエスに再生への祈りを込めてきた。

清和さんの誘いに「心は同じ。やりまひょ」と英大夫さんが応じた。イエス役は人形遣いの桐竹勘十郎さん(60)が務める。人形遣いの足元まで見える能舞台で文楽をどう見せるか。清和さんは「どんな題材も普遍の感動に昇華できるのが古典芸能の強み。近くて遠かった能楽と文楽がキリスト劇で出あい、今に生きる救いになれば」。（西本ゆか）

右「聖パウロの回心」のイエス（観世清和さん）＝前島吉裕氏撮影
左「ゴスペル・イン・文楽」から